

般若心經の核心

福井文雅

一 問題の所在

玄奘譯『般若波羅蜜多心經』（以下、般若心經と略す）は大般若經六百卷の要旨であるとか、大乘佛教の根本思想を要約した經典であるとか、一般には言われるのが普通である。具體的には、「色即是空、空即是色」の空觀を説く經典だと説明されている。

ところが、般若心經をそのつもりで読んでみると、空觀以外にも佛教の基本的教理が数々含まれているし、その上、最後には、「揭諦 揭諦（ギャター ギャター）」で始まる呪文も出てくる。そこで讀者は、この經典の中心となるテーマは何であるのか、教説の重點は、要（かなめ）は、どこにあるのかが判らなくなり、とまどってしまうのである。

般若心經の經文の一字一句については、または、その中の佛教用語については、微に入り細をうがった説明や研究はあっても、「この經典が言おうとしているのは結局何なのか」という問いに、簡明に、出来れば一言で、答えてくれているような本は無い、とまで言われるのである。

小論は右の問いに答えようとするものである。

二 解釋の方法論

般若心經が、一口で言ってしまうという經典かという説明は無い、とか、般若心經の核心は判らない、とか言うならば、「そんなことはない、とくに判っているではないか、」と反論されるかもしれない。實際、例えば、般若心經の基本的な參考書である岩波文庫本『般若心經』の表紙・帯には、

日本における佛教のほとんどは大乘佛教であり、「般若心經」はその根本思想である空の理法を説いたもの。

という説明文が附いているからである。

この説明文に間違いはない。しかしながら、この文は通説を伝えるだけであって、佛教學者が全てその通りに考えているわけではないのである。むしろ、そのようにはっきりとは斷言しないのが普通である。代表的例としては、字井伯壽『佛教辭典』の「般若波羅蜜多心經」の解説（八七四頁右）を引くならば、

般若皆空の心要を略説したる經にて、顯教には大般若經の要を萃めたるものとし、密教には般若菩薩の内證三昧地を説けるものとす。

と書いて、顯・密兩様の解釋を掲げ、しかも、「研究を要す」とはっきり書き加えて、決斷を保留しているのである。右の問題點を平易に書き直すならば、同じ般若心經の中に、空觀と呪文とが一緒に説かれているが爲に、顯教と密教の立場では、どちらを般若心經の核心と見るかで、解釋が分かれるのである。兩方共に、他の諸佛典を參照して博引旁證、本文の説明に當てているが、兩方の解釋は平行のままで今日に到っているのです、どちらの解釋が般若心經の核心に當っているのか、

般若心經の核心（福井）

か、學界でも未だに決着がつかない状態なのである。

未だに決着がつかないという現状については、方法上の問題が大きな原因になっているように私は考えている。それは次のようなことである。

或る文獻の核心を知ろうとする場合には、その論述の流れを追って、その文が究極には何を言おうとするのかを探るのが、とるべき方法ではなからうか。ところが、般若心經の一般の解説書では、字・句々の説明は詳しいが、それらの字句が相互にはどのように連なり、文末にまで到っているのか、本文自體の構成はどうなっているのか、という觀點から書かれた解説は、不思議にも、ほとんど見ないのである。

そこで本稿では、從來の解説や研究を忘れて、つまり、一切の先入觀なしで、般若心經の本文の思考の筋だけを追って、その言わんとする結論を把握してみようとするものである。いわば唐代の一漢人の身になって般若心經を初めて手にして讀んだならば、どこにその思想の核心を見出すだろうかと想像してみるのである。

三 般若心經の構造

般若心經の論理の展開、話の筋、運び具合を讀みとろうと

する場合、(古來の科文も含めて) いろいろな讀みとりの方法はあろうかと思われるが、私は文中に出る「故(ゆえに)」の語を一つの目安にしたい。「故」は論述で順當な接續を示す語としておおむね使われるからであり、従つて、その語の出てくる箇所で區切つて行けば、論理上の段階的な新展開を見てとることが可能だからである。

もつとも、中國古典などの外典に出てくる「故」は、論理上の順當な接續を必ずしも意味しない場合も少なくない。「以(もつて)」や「則(すなわち)」の意味で使われる場合がその例である。

しかし、佛典での「故」は上文の理由を説明して次文に續ける役目を果す語と見てほとんど支障はない。もつとも、佛典中の「故」には、同じ順接の役はしても、「故(ゆえに)——」という場合と、「——なるが故に」という場合の二様があることは周知の通りである。それはサンスクリット原文に對應しているのであつて、前者の「故に」(或は「是の故に」)は *tad* の從格 *Abl. tasmāt*、後者の「——なるが故に」は具格 *Instr.* または從格の譯である。般若心經で言へば、「是故空中無色(是の故に、空の中には色は無く)」と、「故知般若波羅蜜多(故に知りぬ、般若波羅蜜多是)」の

二例が前者であり(勿論、連聲の變化はしている)、あとの五例の「故」は後者である。例えば、「以無所得故」の原文 *aprāptivena* が後者の一例である。

前者の「故に(或いは「是の故に」)の方が、論理的な新展開を示す點では後者よりも明瞭ではあるが、後者もまた、論述の進展、一段階を示す點では變りはない。

さてそこで、漢譯のこの「故」を論述の一區切りと見なし、般若心經の本文全體の構造を區分けてみると、およそ次のような八段階に話は進展していることが判る。

先ずは、「觀自在菩薩、行深般若波羅蜜多時(觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行じし時)」の文から始まり、有名な「色即是空、空即是色」の文を経て、(岩波文庫本『般若心經』を例にとつて行數を示せば) 十二頁第一行目の「不増不減」に至る(以上を假りに第一段階とここでは見なす)。そこに、「是故空中、無色」とあつて、空の中には五蘊・十二處・十八界・十二因縁・四苦が無いことが説かれる。それに續く六行目「以無所得故(得る所無きを以ての故に)」の一文は、梵文テキストと比較した場合問題の多い箇所であり、岩波文庫本註三二では「この語は法隆寺梵本に従つて、無い方が分り易い」とまで言われるのであるが、「故」の語が附

く文として一應残せば、ここまでが第二段階になる。

これにすぐ續く七行目「菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、心無罣礙（菩提薩埵は般若波羅蜜多に依るが故に、心に罣礙無し）」になると、改めて「般若波羅蜜多」が説かれ（第三段階）、「心」という語も初めて現われ、「無罣礙故、無有恐怖（罣礙無きが故に、恐怖有ること無く）」と續くのである（第四段階）。次には、菩薩と同様に、三世諸佛もまた「依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提（般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たり）」と、同じく般若波羅蜜多の功德が説かれる（第五段階）。従って、十二行目「故知、般若波羅蜜多 是大神咒、是大明咒（以下略）（故に知りぬ、般若波羅蜜多はこれ大神咒なり、これ大明咒……なることを）」であり、「能除一切苦、眞實不虛故（能く一切の苦を除き、眞實にして虚（いつわり）でないが故に）」般若波羅蜜多の咒を説くことに、話は進む（以上、第六段階）。この「眞實不虛故」の「故」は、前接にとるか後接とするかで、古來議論の分かれる語ではあるが、この語を境にして、直後に密咒が引かれるところから考えれば、この語をもって最後の第七段階に入ると見ることが出来る。そして、終末には有名な密咒（第八段階）が来て、かくして、般若心經（小

般若心經の核心（福井）

本）の本文は終るのである。

「故」の語を目安にして、般若心經の本文を右のように八段階に區分してみた。古來、般若心經については、中國でも日本でも數多くの區分の仕方、科文が提唱されては來ているが、拙論のように「故」を基準にして區分けた例は見ないようである。

ともあれ、右のようにして本文の論述の展開を辿ってきて見ると、般若心經の本文構造について、次のような明らかな特徴を指摘できるのである。

岩波本で言えば12頁の七行目「菩提薩埵は般若波羅蜜多に依るが故に、心に罣礙無し」の文章を境い目にして、明らかに本文の内容は二分される。それ以前は「空」についての説明であるのに、この文章から後になると、ガラリと話題は一轉して、突如、般若波羅蜜多の功德と心との話に移っているからである。

概括して言えば、この文を境いにして、前半は教理を、後半は實踐の方法を説いていると見ることが出来るのではあるまいか。この文章以下の數行を、弘法大師空海は『祕鍵』の中で「行人得益分」つまり、般若波羅蜜多を實踐する人が得

る利益を説く章、と呼んでゐるが、師の解釋は私の見方を支持してくれるものと言えよう。

右のように、波羅蜜多の論理展開を八段階に區分する方法に大過が無いとするならば、そしてまた、「菩提薩埵」の文あたりで本文全體が明らかに二分されていると見る私見が當つているとするならば、このような構造の般若心經を讀んだ唐代の中國人は、そのどの部分に惹かれたであろうか？ 一方また、現代の我々から見た場合でも、そのような構造であるとするれば、般若心經は、結局は何を説こうとする經典と見えるであろうか？ つまり、般若心經の核心は何か、の問題に、次は移らなければならない。

四 般若心經の核心——その一

般若心經は大乗佛教の空觀を説く經典だと古來言われてきたが、前節で分析した結果では、「空」の説明は前半で終つてゐることに氣付く。有名な「色即是空、空即是色」の文にしても、第一段階の中で説かれただけである。本文全體の構造から判斷するならば、いわば「序文」に當る部分に入つてゐるのである。

その前半だけで終つてゐるならば、般若心經は空觀を説く

經典であると規定できるかもしれないが、その後はまだ文章は續いてゐる。そのように連續する文章構造になっている以上は、空觀を説く前半部分は、後半部分への伏線、前提に（論理的には）なつてゐると見なすのが普通ではあるまいか。

この經文全體を書いた筆者の立場に假に身を置いて考えさえすれば、右のような構想は、容易に想像できるはずである。

それでは、空觀の説明を前提として、筆者は結論として何を述べようとしたのか、ということになるが、それは、これまでの分析で既に明らかになつてゐるやうに、般若波羅蜜多の功德であつた。具體的には、最後に誦出している「揭諦揭諦」で始まる密呪の功能である。般若心經の筆者の重點はそこにあつたはずである。

もしも空觀を主テーマに説こうとする經典であるならば、前半部分の文章だけで終りにして良かったはずである。たとえ續けるにしても、空觀を更に理論的に展開させた文章にするはずであつて、後半に入つて、急に「般若波羅蜜多」と「心」とを持ち出し、密呪を結論部分にすえる必要はなかつたはずである。

般若心經の文章構造そのものを分析し、「故（ゆえに）」の語の積み重ねで論理が連續し、展開してくる話の筋、運び方を辿るならば、般若心經の思想的究極は、般若波羅蜜多の功德、般若波羅蜜多の咒の絶大な力への讃嘆にあることは、ほぼ明らかになったのではあるまいか。

しかし、人によっては、般若心經の主要部分は前半であつて、後半は前半の附録であると解釋したり、甚だしきは、後半部分、とりわけ密呪は後世の附加だと見る人もある。しかし、「故（ゆえに）」の語で全文が次々に連結して論述が進んでいる以上、後半を附録と見なすことは無理であらう。そのような文章構造にあつては、前半を後半の前提もしくは伏線と見なすのが順當な見方であらう。

第一、後半部分が附録であるとか、後世の附加であるとかの解釋を支持する證據もテキストも、未だ出ていないのである。

般若心經では、比重は後半にかかっていることは、次に述べる事柄からも證明できる。それは、般若心經が含むもう一つの核心である。

五 般若心經の核心——その二

般若心經の核心（福井）

般若心經の理論をつきつめて行けば、般若波羅蜜多の咒の功德に行きつく、それが般若心經が主張したかった究極の考え、すなわち「般若心經の核心」であることは、前節までほぼ明らかにし得たと思うのであるが、しかし、この結論は、現代人の我々が引き出した解釋である。唐代の中國人讀者は、それとは別の觀點から、そのような理窟からではなくてはつきりとした證據から、般若波羅蜜多の咒の重要性に氣付いたはずである。

その證據とは、密呪の直前に出てくる文章、「能除一切苦、眞實不虛（能く一切の苦を除く、眞實にして虚ならず）」の文である。

般若波羅蜜多の咒の威力、功德を般若心經は説いている。それでは、何故般若波羅蜜多はかくも尊ばれるのであらうか？ それは、能く一切の苦を除いてくれるからなのである。般若波羅蜜多に依れば心に罣礙（覆うもの）が無くなく、恐怖も無くなり、永遠の平安に入ることが出来る——そのように説く文の箇所こそ、一般の讀者は注目したに違いない。

その「能除一切苦、眞實不虛」の文末には、既に述べたように「故」が附いている。梵文原文に依るならば、これは前

に續けて「眞實にして虚ならざるが故に。」と讀む語であり、この讀み方に従うならば、この文の前後の意味は、「般若波羅蜜多是眞實で虚しくないから、能く一切の苦を除く」ということになる。この解釋をとる人々もいたが、漢人讀者の多くは、後の文に續けて「眞實にして虚ならず。故に」と讀んだようである。漢文の讀み方としてはこれが當然だからである。

唐代にこの讀み方があった證據を一つ次に挙げよう。それは、義淨（六三五—七一三）の譯文の中に出てくる例である。

義淨譯の『佛說拔除罪障呪王經』の末尾（大正藏卷二、九一三頁b）に、

此大呪王是不思議法、是大神呪是大明呪、是無上呪是無等等呪、能除罪苦障、眞實不虛。爾時諸天大衆聞說呪王、皆大歡喜頂戴奉持。

と、般若心經とは同じ譯文が見える。義淨は玄奘の風を慕っていたと言われるから、玄奘譯を模倣した譯に違いないが、しかし、『眞實不虛』の次の「故」は取っていない。義淨はそれを後接の語と理解していたからであろう。

この義淨のように「故」を後文に續けて「眞實にして虚ならず。故に」と讀むと、前後の意味は（前に接續させる場合

とは違って）、「般若波羅蜜多是能く一切の苦を除く。（その威力は）眞實であつて、決して虚（いつわり）ではない。故に」となる。つまり、般若波羅蜜多の功德を強調する文になるのである。

中國人が讀めば、必らずやこの意味に理解したであろう。事實、右掲の義淨の譯文はその意味にしか取れない。

この「般若波羅蜜多」能除一切苦、眞實不虛」の文に一般中國人讀者は注目し、それから引いては、般若波羅蜜多の重要性に氣附いたのであろう。その意味では、般若波羅蜜多とこの文とは表裏を成すものと言えよう。つまり、理論的に言えば般若心經の核心は般若波羅蜜多（咒）に在るが、一般讀者にとっては、「能除一切苦」こそが般若心經の核心に見えたのではなからうか。

右のように推察するには、確かな傍證がある。それは、般若心經の冒頭に出てくる「度一切苦厄」の一文である。實は、この文に對應する梵本原文は無い。つまり、この文は玄奘が後から挿入した文なのである。何故挿入したか？それは、般若波羅蜜多の力と能除一切苦の働きの表裏一體となす以上、冒頭の「行深般若波羅蜜多時（深般若波羅蜜多を行ぜし時）」の文に續けては、どうしても「度一切苦厄（一切

の苦厄を度す」の文を續け、對應させねばならないと考えたからであろう。

この「觀自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄（觀自在菩薩が深般若波羅蜜多を行ぜし時、五蘊は皆な空なりと照見し、一切の苦厄を度せり）」の文について、金岡秀友校注『般若心經』（講談社文庫、51頁）は次のように言う。

昔から、『心經』一經の大意は、この一節に盡きるといわれる。「色不異空」以下の「般若の哲學」は、この大意を再説・詳説して委曲を盡くすに過ぎないともいわれるわけで、ここから、『心經』の全文を要約すると、この「人法總通文」の一節となり、さらにこの一節を縮めれば、『般若波羅蜜多心經』の經題となり、またその經題は「般若」の一語に集約され、それはさらに「心」の一字となる、といわれるのはこのためである。

文中、*印で示した文以下に引く通説は論理的に飛躍があり理解しにくい、前半の説は確かにその通りと言えよう。但し、これまでの解説書では「五蘊皆空」の文がこの中心であると見て、この四字の説明に多くの頁をついやして、以下に續く「色不異空（色は空に異ならず）」の文に結びつけて

般若心經の核心（福井）

説いていて、「度一切苦厄」の文の重みに氣づいていない。實は、右の冒頭の二十五字で重要なのは、「度一切苦厄」の五字なのである。深般若波羅蜜多を行じた結果、一切の苦厄を度した、と言うその結論が大切なのであり、それを言いたいが爲に玄奘は敢えて「度一切苦厄」の文を挿入したはずである。従って、「五蘊皆空」の哲理は添え物か序説の役でしかなく、冒頭の二十五字の中で重きをなす文ではないのである。

むすび

般若心經の本文そのものに即して、その文章構造それだけから見て、般若心經の核心は本文の後半部分にあることを論じてきた。とは言え、般若心經では「空」を論じていないとか、空觀を重視していないなどと主張するわけではない。確かに空觀の所説はあるが、それは後半部分の前提、序説、伏線であって、比重を考えれば後半が言いたいところの説だ、というわけである。

般若心經が漢譯されて歡迎されたのは後半部分がたったからである。唐代にも、空觀を説く經典、般若波羅蜜多の功德を説く經典、神呪の威力を説く經典はそれぞれ別々には存在

した。しかし、般若心經ほどの短かい經文の中に、空觀を前提として般若波羅蜜多（咒）の功德を併せ説き、それを唱えれば「能く一切の苦を除く」と強調している經典は他に無い。それが、般若心經が後世にまで人々を引きつけた理由なのである。

それが證據に、前半が無くとも般若心經は成り立つが、後半部分が缺けたのでは、般若心經の教説は完結しない。讀者にとっては、有難味は全く無い。缺くことが出来ないということは、それが「本質」であることを意味するのであり、つまり、後半が般若心經の本質に當ることは、更に明らかである。

附記

本稿は、昨年（一九八六年）六月七日に、早稻田大學東洋哲學會で述べた同題名の研究發表の活字化である。但し、活字化に當って、かなりの補筆を加えてある。

その發表の時には、右の論旨に續けて、唐代における般若心經の受容史を述べ、右の結論を社會史的に裏付けたのであった。しかし、その受容史は、今春出版した拙著『般若心經の歴史的研究』（春秋社）の中に収めたので、ここでは再説

するのをさし控えた。

般若心經とはどういう經典であるのか、何を結局は説こうとする經典なのか、という問題は、判っているようでいて、實は良くは判っていない一つの大きい問題であった。それをまとめて、右の拙著の中に、いわば研究全體の結論として入れるべきであつたかもしれないが、私は敢えてそうしなかった。本稿はその問題への答えであるが、御覽のように、純粹に理論的な議論であり、つまり、時・空を離れた議論であるから、歴史的社會的考察を主とした拙著の構成とは、どうしてもそぐわない感じがしたからである。

しかし、本稿で示した解釋と拙著での研究結果とは表裏を成すものであつて、般若心經という佛典の性質を兩方から分析し、兩方が相い補う結果になっている。本稿のような、般若心經の教理の組み立て方、構造を分析し、つまり、ただ理論上からのみ考えて得た結論と、歴史的・社會的資料から歸納して得た結果とが、同一文獻についてそれぞれ別個に獨立に研究して得た結果であるのに互いに矛盾せず、「般若心經とは何か」への答えて合致する結果になったことは、私の秘かな喜びである。